

61

## 小島寶素堂の終焉

——小島尚綱と森鷗外『小嶋寶素』——

多田 伊織

国際日本文化研究センター

森鷗外の『小嶋寶素』は、大正6年10月に13回にわたって、『東京日日新聞』『大阪毎日新聞』に掲載された短編の所謂「史伝」である。連載開始前に鷗外は幕府医官であった宝素父子三代の事跡を「窮めらるる限窮めてゐる」（「観潮楼閑話」）と見得を切っていたが、事實はそうではなく、資料的制約が大きく、小島宝素父子の業績について十分な知識がなかったことについては、昨年の発表「森鷗外『小嶋寶素』と小島尚綱『日新録』」等ですでに指摘している。本発表では、更に、鷗外が作品中で閑却している、小島宝素父子に関する事実、そして小島尚綱の明治維新後の事跡を明らかにし、鷗外の所謂「史伝」の問題について指摘したい。

東大鷗外文庫に残る『校勘家事蹟』は、鷗外が所謂史伝を執筆するに当たり、当時存命の江戸医学館関係者の子孫・縁者に問い合わせた結果、得られた書翰や回答の原本や写本を綴り合わせた資料集である。この中に、小島宝素（本名尚質、字学古、医名春庵 寛政4—弘化5 1792—1848）と親交があり、二子尚真（字抱沖、医名春沂 文政12—安政4 1829—1857）尚綱（字瞻淇、医名春澳 天保10—明治13 1839—1880）兄弟の妻猶・定姉妹の兄弟である、埴忠韶からの書状が収められている。忠韶は鷗外に答える書状の中で、「宝素の号は、宋板『黄帝内経』を珍藏していたことによる」と記しているが、鷗外はこの事実を『小嶋寶素』には取り上げなかった。この事實は、小島家の家学である考証学の性格を考える上で重要であり、尚質は「倭宋」と自称するほど宋板を愛好したにも関わらずである。忠韶の書状から別な事實は、『小嶋寶素』に採用しており、鷗外の考証学に対する学識と態度がここに露呈しているとみて良いだろう。

また、『小嶋寶素』は、明治13年まで生きた尚綱の、明治維新後の事蹟をほとんど記さない。しかしながら、鷗外は、所謂「史伝三部作」の第一の作品『澁江抽齋』で、『経籍訪古志』に言及し、本書が森立之を介して楊守敬とつながりを持つことを指摘している。現在、台湾の故宮博物院が所蔵する楊守敬旧蔵の善本文庫「観海堂」の内、医書や写本の貴重なものは、小島宝素堂旧蔵であり、明治13年の尚綱病歿後に、恐らく森立之を介して楊守敬にまとめて売却されたと考えられる。明治5年、小島尚綱と森立之は日を同じくして明治政府の文官に採用されており、これは偶然とは考えにくい。

小島尚綱は、没後16年後の明治39（1906）年に刊行された『歴史地理』vol.8-1の口絵「明治初年の地誌家肖像」に取り上げられ、『日本地誌提要』編纂に功があったと特記されている。『日本地誌提要』は、日本が近代国家として初めて参加したウィーン万博出品のため、当時の国力を挙げて編纂された日本の総合的地誌である。本書を繙くと、編纂担当者全12名の内、3番目に小島尚綱の名が見えている。尚綱逝去後には、その地理局での功労を特に顕彰するために、祭料が申請されている。こうした尚綱の功績については、鷗外はまるで取り上げないのである。

以上のように、鷗外の所謂史伝『小嶋寶素』は、決して客観的な態度で執筆されたものではなく、幕府医官であり考証学者であった宝素父子の事蹟のみならず、維新後の尚綱の新しい人生についても、光を当てることはない。鷗外の所謂史伝は、一般的な世評とは異なり、公平であるというよりは、鷗外の価値観を体現する部分についてのみ、記述が詳細であり、考証学全般のパースペクティブについては知識が乏しい傾向がある。

尚綱は、自らの手で宝素堂蔵書の売却を計画していた。それは、旧時代の何一つ不自由ない才能に恵まれた漢方医が、医を捨て、地誌家として明治の世を生きるための方策でもあった。